

# 篠弘百首

## 三枝昂之 選



篠弘

### 『昨日の絵』

闇裂きて頭上に破れし焼夷弾われの風土となりて降りつぐ  
かたすみに空きしをもとめ停電の夜をまなびき山ノ手線に  
楓若葉かがよふ芝に坐りをれば二人あることに心充ちゆく  
競ひあふ事の多きを嘆かへば人はまじまじとわれを見上ぐる  
足取りに遅速のありて帰りゆくわれをめぐりてき霧が泳ぐ  
戦ひの武器増えゆくを平和とすかかる平和のきりぎしが見ゆ  
細き道うづめて萌ゆる若芝のみどりを踏みてわれらは歩む  
高楓の大樹の蔭に歩み入りておのづからいまは二人となりぬ  
石橋を渡らむわれら池の面に着くあかるくともに揺れるる

差しみて唇ふれしより幾日過ぎかくあたたかき便りをくれぬ  
貸出しの図書を待ちをるいとまにて書きはじめたりきみへの返事  
電話にてひとの励ましをうけし夜夢の中にもペン執りてみき  
この週に学びて得たるレポートを一息に言へりきみに対ひて  
唇ふれむばかりに近く面よせてよろこびあへり職決まりしを  
よみあはず校正の声はづみあふ編集室の夜半をこたます  
読みくれむ子らを思ひて校正をくりかへす間に窓白みくる  
高層の炎ゆるガラス戸越しにゐて催涙ガスをともにし浴ぶる  
わが過去にかつてなかりし疲れ出でみなを待つストの編集室に

雲低くみどりに染まり昏れてゆく一人にて知る空のうるほひ

街昏れてひとりたたかほざるわれが編集室に黄の灯をともし

駆け上がる次の会議の階段にかなしきまでに方位感あり

ラルースのことばを愛すわたくしはあらゆる風に載りて種蒔く

鳴りいづる電話待つ間のひとときか心はさやく朝のデスクに

いまだわが本音を吐かず同僚に言はざりしこと浄くはあらず

あらあらとわれをうながすのびやかなる獣のごとき若者はあらず

ゆとりもつ人のごとくに見るさくら花びらは闇を仰ぎて噴ける

よろこびはかくかそかにて集団の中の孤立にかきなることし

剛直に生き給ふなり師の齢のまきに半ばになりたるわれか

啄木を超え得ざりしとかつて師の言はざりしこと最期に聴けり

四台のエレベーターがわれに開き明るさを増す朝のロビーは

くれなるの雲翳りゆく高層の視野のかぎりを人びとの住む

敗れたる後のすべなき三十年たたかひに似て若き身は過ぐ

したたかに百科全書派酔ひしれてギター弾きつついづくに到る

ねそびれてわが傍にくる少公女くれなる淡き耳を濡らせり

『百科全書派』

言ひ過ぎし会議の後を降りきたる地下の茶房に一人となりぬ

いち日を恥づる思ひに浸りつつエスプレッソの苦きをふふむ

雪降れば鳴子をおもふはじめの輝に泣きし疎開児あはれ

出会ひたる燦めく樹氷はるかなり再びはわが訪はざる鳴子

みちのくの鳴子に一冬潜みし学童疎開はひもじかりにき

ありなしの風の渴けば「反核」の思ひ途切れて身はありどなし

変節の何ひとつなきうつしみの深夜にのびしざらざらの髭

「抗日」に老舎はふれず日本の菊づくりする愉しき言ひき

文革に死を選びたり時流には屈せざる性ひるむことなき

いくたびか百科を編めり抛るべきはおのれ一人と思はずに來し

突き放し突き放したる言はいへ心を覗くことも知りそむ

ペン皿に散らばりあひてわがためにみな光りもつ渦のクリップ

ビル街の間なる道に曲りきてわが言ひ過ぎしことばをメモす

照明のくれなる帯ぶるぼたん雪夜は色あるものぞひしめく

雪の来るけはひの空を見はるかしレイアウト室に珈琲をのむ

はじめての虹を見るがに踊り場に数分けて彩かそへあふ

『濃密な都市』



エスカレータ舞ひのほりゆく蹠くまの細き少女のあとにわがあり

うからのみな寝ねたれば体温の残れる椅子にふたたび坐る

つきつきにそろふ刷出すりだしの美はしき彩いろいつまで机を離れぬわれら

はじめての一冊を手に回しあひデザイン室に声満つるかな

両手にて掲あぐればまろぶ光りの輪その金箔のかがよふ表紙

この八年いそしみあひし軀みを寄せて編集室に缶ビール持つ

それぞれの席を巡りて乾杯をくりかへすわが声徹りたり

秋に入りてみなと呑みあふ夜の地階初校再校そのはざまなる

夜に入りて工事はじまる高速路下りて黄葉の道に入り来ぬ

ゆふぐれの駿河台坂あがなひし古書重ければネクタイ解かむ

まどかなる夕虹たちて聖橋ひらばし渡るくるまはみな虹をもつ

君ありていまのわれあり敬語もてけふは退社を告げきたる人

ナイターの競馬のさまを斜め見てわがモノレール東京に入る

みちのくに学童疎開をせしわれら薪たきを背負ふ写真出で来ぬ

硫黄島を黒板に書き玉砕の迫りしをともしに泣きたるわれら

はからざる階に止まれば霧に濡れくれなむを増す街の灯が見ゆ

ともしびに頭づを近づけて定年をひかへし人が罨く引きてゐる

降職を決めたる経緯ありのままに声励まして刻みつつ言ふ

浮遊してゆくばかりなるさびしきに昼の休みを古書店にゐつ

放たれて古書のかをりに紛れ入るその折々はおほよそ寂し

若者の保守になだるる漂蕩の駿河台下を抜けゆかむとす

墨ぬりて国史教科書を読みし子が百科全書に歳重としねたり

長かりし昭和生くれば高層のビル竣なりて空見えなくなりつ

ひとりなるときに渴ける虹彩こうさいに溢るるまでに目薬をさす

かへりみて立て前もまた本音にて携へきたるエディターの群

ほほゑみを絶やさぬままに対話せし喪ひたりしものを怖れず

たぎちゆく言葉をつらね直截に告げたるわれはつひに帰らず

完結はつねに痛みをともしなへり五ごたび百科を編みたるものを

暗闇にからだの冷えてねむりゆく退めたる人のことは忘れず

パーティーに遇はなくなりし人思ひ灰皿の殻を数へてをりぬ

主義なべて逆転しゆく呻吟にこの寒中は身にし沁むまで

高架路をくだらむとして全階のライトの消ゆる一瞬に遇ふ

まがふなく人間われがただよひてデスクの隅のゴム輪を蒐む

はるかなるタワーに赤き月うつり少しづつことばずれゆく通話

首都高速のサイドをくねる神田川汚れしといへ雨脚ひかる

知る顔のひとりとなきロビーより留守番電話の妻の声きく

校了をひかへて失せにし青年が言語障害となりて戻らず

宙吊りに窓拭くさまを目に入れて磯田光一の論を読みつぐ

簡潔につたふる若き通訳のことばは何を省きたりしか

ゼブラゾーン速歩に人を追ひ越せり酔ひたるわれは寂しかるべし

還らざるひと日は過ぎむ指をもてグラスにあそぶ氷片掬ふ

芽ぶきそめて枯れし二本の白樺にこだはりてゐる中年われが

大戦を凌ぎしレニングラードの白夜にうるむ星を仰げり

数枚のコピーのずれを綴ぢなほし三枚目よりわが説かむとす

よどみなく企画の決まる感触は言ひがたくしてその次に入る

目葉の溢るるしづく掌に拭ふさびしきさまを二度くりかへす

ルーへもて活字をたどり問ひつげる眉間の皺は知らざりしもの

システムにしたいに与し損ねたる古代朝鮮史まなべる友が

返りくることばを待たむ直截に応ずる人は危ふかれども

高層のビルの裏なる駐車場われのみを射す月のひかりは

歌の表記・ふりがなは原則として歌集に準拠しています。

むかし半田良平賞という作品賞があった。窪田空穂の歌誌が結社の枠を取り払って、若い歌人を競わせたユニークな賞である。私の父は植松壽樹の指導を受けていたから、家には「沃野」のバックナンバーがあった。中の一冊をなにげなく手にとって、半田良平賞受賞作品「卒業期」を読んだのが、私の篠弘体験の最初である。受賞は昭和三十年だが、読んだのはその五年ほど後、私が高校生

の時代だろうと思う。「石橋を渡らむわれら池の面に蒼くあかるくとも揺れるる」は一読してわが愛唱歌にな

った。ひたむきでまぶしい青春がそこにあった。百首を選ぶが今回の機会に再読してもこの印象は変わらない。

昭和二十年代後半、日本が再建の道筋をなんとかつかまえ始めた時代、そんな時代の真摯で前向きな青春を『昨日の絵』はあざやかに歌い上げている。篠弘の世界に一貫して流れるのはその「真摯に生きる意志」だろう。それを意識しながら百首選を行った。

三枝昂之（さいいぐさ・たかゆき）「りとむ」会員